THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA HISTORY RESEARCH GROUP

西宮歴史調査団ニュース　第１号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662-0944　電話　0798-33-1298

新堀川 はし物語　–橋梁調査班･新堀川チームの調査から–

宇野信子･佐藤敬子（西宮歴史調査団）

はじめに

平成7年1月17日の阪神淡路大震災後、被害の多かった地域を中心に古い建物が新しい住宅に田畑が宅地に変わっていく様子が町のあちらこちらで見られた。

そこで、身近にある文化的遺産を調査記録する目的で西宮歴史調査団が作られた。私たちは、橋梁調査班に所属し新堀川にかかる橋の調査をすすめた。

平成18年度は新堀川の出発点である鯨池浄水場から阪急電車神戸線以北を、翌平成19年度は同以南を調査し、それぞれ『西宮歴史調査団年報』にまとめた。

新堀川を現地調査した結果、橋の数や名称だけでなく、さまざまなことが見えてきた。今回はそれらを『新堀川 はし物語』としてまとめることにした。

１．新堀川

新堀川は、鯨池に湧き出す武庫川の伏流水を水源にして掘られた農業用水路である。戦国時代末の豊臣時代に洪水時に武庫川が氾濫しないよう、連続堤を堅固に築く河川の工事が進展した。江戸時代の初めの慶長10年（1605）の摂津国絵図には、武庫川と枝川の両岸に川筋に平行して黒線が描かれており、当時、すでに連続堤が完成していることをうかがわせる。この連続堤の完成によって武庫川の氾濫原の荒地を新田とする開発の可能性が生まれた。しかし、この荒地は武庫川の透き水（伏流水）が多く、簡単には開発できないことがわかった。そこで尼崎藩主青山幸成は、透き水抜きと用水源を目的に新しく川を掘らせたのである。こうして人工的に生まれた新堀川は、「裏川」「返し堀」とも称された。

したがって、新堀川の歴史は新田開発と非常に密接で、周辺の新田に農業用水を供給し続け耕地面積を増やした。

戦後は農地の宅地化が進み、現在では各農家が地下水をくみ上げて農業用水としているので、現在の新堀川には農業用水路の機能を求めなくなった。

新堀川を流れる水は、雨水と武庫川の伏流水（コンクリートの川底の一部に穴

をあけて武庫川の伏流水が流れ込むしくみ）である。鯨池浄水場によると、川としての機能維持と周辺の環境保全のために、浄水場の水源に余裕があれば浄水場の水を流しているということである。

このように、新堀川の役割は昔と今とでは大きく変化している。現在の新堀川の川筋は、武庫川の西岸を武庫川沿いに南下して、ＪＲ東海道本線を少し過ぎたあたりで武庫川を離れ、南西に向きを変えて国道２号を潜り、さらに南西へ流れて、春風小学校付近で新川に合流する。

写真1　甲子園口北町4-28東側の橋（JR神戸線北側）

２．新堀川にかかる橋

（1）新堀川にかかる橋の分類

新堀川にかかる橋をすべて調査した結果、次のような観点に分けられることに気がついた。

①「パブリックブリッジ」‥だれでも自由に行き来できる橋

阪急神戸線以北に13ヶ所、以南に31ヶ所確認できた。

②「プライベートブリッジ」‥個人的に利用される橋

調査上では、個人宅への橋として表記している。例えば、一軒の家、集合住宅、倉庫、家庭菜園等へ限られた人たちが行き来する橋があった。阪急電車神戸線以北に7ヶ所、以南に43ヶ所確認できた。

③「コミュニティブリッジ」‥地域で利用する橋

新堀川のすべての橋をパブリックブリッジとプライベートブリッジに分類した。しかし、これらの橋の中には橋上を地域で利用している橋もある。自治会の掲示板や花壇・ゴミステーション・お地蔵さん等がある。このような橋をコミュニティブリッジと名づけた。但し、調査活動中に上記のような利用の仕方が見られない場合もあるので、ここでは橋の数は記さない。

（2）新堀川のこんな橋あんな橋

新堀川にかかる100近い橋を調査すると、周辺の景観から①～④のような特徴が見られることに気がついた。その特徴ごとに一部を以下に紹介する。

①流水経路が大きく変わるところの橋

●旭橋［甲子園口2丁目12-13］‥上流からここまで南へ向かって流れていた川は、ここで流れる向きを南西へ変える（写真2）。

写真2　旭橋［甲子園口2丁目12-13］

②街並みにとけ込んだ橋

●栄橋［甲子園口2丁目8-20］‥親柱は白御影の化粧石で、黒御影の橋名板がはめこまれている。欄干は鉄製で幾何学模様の透かしがある（写真3）。

③歴史を感じさせる橋

●松並町5-40東側の橋‥欄干は御影石で化粧されているが、かなり劣化が進んでいる。左岸の上流側と右岸の下流側の親柱の上に橋灯を支えていたと思われるボルト４本が残っている（写真4）。

④私設で素朴さを感じさせる橋

●日野町9-21東側の私設の橋7本‥左岸側の家庭菜園や花壇の世話をするために架けられた橋で、いずれも老朽化している。左岸側は武庫川右岸の堤防の斜面である（写真5）。

写真3　栄橋［甲子園口2丁目8-20］

写真4　松並町5-40東側の橋

写真5　日野町9-21東側の私設の橋

３．新堀川の橋と春夏秋冬

西宮市の東端をはじめは北から南へ、やがて西へと流れを変えるこの川の両岸には、さまざまな木々が植えられており、四季折々の変化を楽しむことができる。季節ごとに橋と周辺のようすを紹介する。

（1）春　美しい桜並木

●松並町7-1個人宅への橋＜ＪＲ西日本甲子園口寮＞‥右岸側の道路には樹齢を重ねた桜の木々が川面を覆うように枝を伸ばしている（写真6）。

（2）夏　緑の深い木々

●甲子園口北町24-9個人宅への橋‥よく茂った木々の木蔭と川の流れが涼しさをよんでいる（写真7）。

（3）秋　鮮やかな紅葉の蔦

●上甲子園2丁目12-15東側の橋‥左岸側のフェンスにからまっている蔦が赤や黄に色づいている（写真8）。

（4）冬　葉を落とした桜

●円満橋［甲子園口2丁目3-19］…数枚の葉を残した桜が冬晴れの中にたたずんでいる（写真9）。

写真6　松並町7-1個人宅への橋

写真7　甲子園口北町24-9個人宅への橋

写真8　上甲子園2丁目12-15東側の橋

写真9　円満橋［甲子園口2丁目3-19］

４．橋上に集う

橋は向こう岸に渡るためだけではなく、その橋上をある目的で利用していて留まる場所でもある。

（1）情報交換の場

●甲子園口北町4-28東側の橋‥自治会の掲示板が設置され、地域にとって必要な情報をここで得ることができる。また桜の季節にはお花見に絶好の場でもある。

（2）文化伝承の場

●上甲子園1丁目4-10個人宅への橋

‥右岸下流側にお地蔵さん（北向地蔵尊）が祀られており、8月23日･24日には地蔵盆が行われている（写真10）。

(3)こんな使い方も

●甲子園口北町4-28東側の橋（ＪＲ甲子園口北第1自転車駐車場）‥ＪＲ東海道線高架下で暗渠となっていて、自転車置き場として使用されている（写真11）。

５．新堀川の出発点から新川合流まで

３年間の橋の調査を通して新堀川とそこに架かる橋についてわかったことをまとめると以下のようになる。

（1）流水経路について

新堀川は、人工的に作られた用水路でありながら、直線的ではなくかなり湾曲した流水経路となっている。

出発点の鯨池浄水場から旭橋（甲子園口2丁目12-13）までは武庫川とほぼ平行に北から南に流れている。旭橋から三保橋（上甲子園2丁目15-15）辺りまでは流れを南西に変えて、そこからさらに流れを西に変えているために、橋の架け方は南北になる。そして新川と合流する。

（2）新堀川と周辺地域

新堀川沿いの現在の土地利用については、右岸側は全流域を通して宅地化されている。道路網も整備されていて、川に沿って道路がつけられている（一部ない区間がある）。

写真10　上甲子園１丁目4-10
個人宅への橋（地蔵盆の日）

写真11　甲子園口北町4-28東側の橋
（JR神戸線南側）

左岸側については、出発点から国道171号まではわずかだが住宅が見られる。しかし、そこから阪急電車神戸線までは武庫川の土手に接していて、一部家庭菜園に利用されているが住宅はない。

阪急電車神戸線以南からは武庫川と新堀川がしだいに離れていき、そのあいだに平地があり、新堀川の左岸側にも右岸と同じように住宅が見られる。

左岸側の道路に関しては、出発点から国道171号までは川に沿って道路がある。国道171号と阪急電車神戸線の間は一部散歩道があるが、武庫川の土手になっているために道路はない。阪急電車神戸線の南を過ぎた辺りから武庫川との間に隔たりができて川沿いに道路がある。そのため、阪急電車神戸線以南からは県道114号の利用や住宅街の行き来に新堀川の橋を渡る人や車が多く見られる。

阪急電車神戸線以南の松並町から甲子園口北町の三好病院までは、護岸壁に接して家が建ち並んでいるために、川に沿って道路はない。しかし、この南から旭橋までと、春風橋から新川合流点までは左岸沿いに道路がある。

（3）新堀川の橋・概観

出発点から阪急電車神戸線までは、橋の付近にまだ田畑が残っていて、そこに架かっている橋は素朴な形で名前もつけられていない。一方、阪急電車神戸線以南では、周辺の街並みにとけ込んだ橋がいくつかある。これらの橋には個性的な

欄干があったり、町名や人々の願いに因んだ名前がつけられたりしている。

新堀川沿いの道路のうち住宅開発が進んだ松並町以南では、そこに架けられた橋の形態は、その道路の幅や交通規制に対応してさまざまな形になっている。例えば、川沿いの道路に右左折しやすいように橋の形がスカート状になっていたり、一方通行のために片側のみ裾広がりになっていたりして、右岸側と左岸側の橋の幅に大きな違いが見られる。

6．新堀川の過去と現在

新堀川とこの川に架かる橋について現在の状況はわかってきたが、歴史調査という視点で考えると、過去については謎だらけである。

新堀川は用水路として開発されたが、田畑への水の供給はどのようにしていたのだろうか。せき止めなければ川から水を流すことができないのに、せき止めた跡が残っているのは上之町の1ヶ所にしか見つけることができなかった。

上之町30-40にある水門の使われ方は、その大きさ（新堀川の水門の中では最大）といい、その西にある2つの古い水門との関係から、かつてどのように利用されていたのか疑問が残る。

新堀川は、上甲子園3丁目10-10南東側の橋（写真12）の地点より大きく西に曲がり、新川に合流している。この曲がり方には非常に意図的なものを感じた。川の流れ方からもう少し自然な流水経路があったはずである。

岡本家文書『大庄屋日記』から、新堀川は田畑への水の供給と田畑の悪水抜きという2つの目的だけでなく水運にも利用されていたことがわかった。しかし、その利用の仕方については今のような水深や川幅では不可能に思える。いったいどのようにしていたのだろうか。

調査中の聞き取り（上之町在住の牧野氏・太田土建工業㈱太田氏・平成18年12月6日に出会った60歳代の男性）から、阪神淡路大震災や近年になってからの災害と河川改修については知ることができた。その一例としては、護岸壁・川底の改修や橋の付け替えが挙げられる。それ以外の新堀川流域の河川改修と災害の歴史については、武庫川のように『西宮市史』には詳しく記載されていないので触れることはできない。

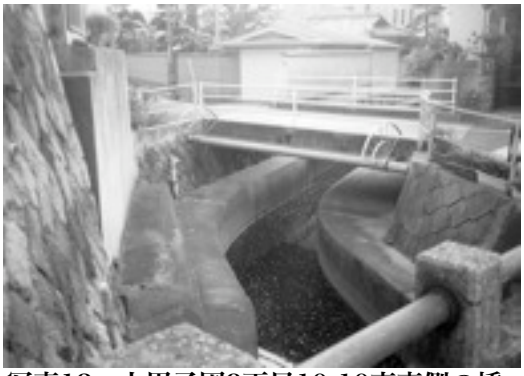

写真12　上甲子園3丁目10-10南東側の橋

7．かけはしとしての新堀川の橋

４．で述べたが、橋は向こう岸に渡るためだけではなく、留まる場所でもあり、さらにいろいろなものをつなぐ場所でもあると考えられる。

（1）人とものをつなぐ

国道２号に架かる橋を、海外からの貨物を運ぶコンテナ等輸送用トラックを始めとして、市内を循環するバスや神戸税関行きの定期バス、通勤や所用で走っている普通乗用車等さまざまな乗り物が通り、人やものがたえず行き交っている。

（2）過去と現在、そして未来をつなぐ

かつて尼崎藩主青山幸成によって新田開発の用水路として1636年に掘られて以来、多くの人々がこの新堀川に架けられた橋を渡り他の地域と行き来してきた。

武庫川の西岸を武庫川沿いに南下する新堀川に架かる橋の役割は、300年以上もの昔から現在に至るまで、そしておそらくこれからもずっと変わることはないだろう。このような往来が、こちらにはないものを他の地域からとり入れたり、あるいは逆にこちらから送り出したりする役割を果たして、互いに発展する手助けをするに違いない。

私たちは、橋をつかってさまざまなものと出合い、そして交流することによって、より良い未来へと進んでいくであろう。

あとがき

私たちの川との出会いは、幼い頃に身近にあった溝や小川との懐かしいさまざまな思い出から始まる。それは、めだか・おたまじゃくし・どじょう・ざりがにそしてほたるを追って遊んだことや河川敷で行われた映画の撮影を物珍しく見たことなどが挙げられる。

このように身近にあった川だが、新堀川は大人になって自宅のすぐそばを流れているにもかかわらず気にも留めていなかった。しかし、橋の調査をするにあたってこの川を選び調査を進めていくうちに、300年以上もの昔に新田開発のために人の手によって造られた歴史のある川だということがわかった。

そして、時代が進み流域が宅地化されるにつれて生活排水を流すという役割も担い、どぶ川と呼ばれる時代も経て、下水道が整備され今では人々に安らぎを与える存在となっている。

新堀川の橋の調査を始めると、目的である橋の測量・写真・スケッチ・利用状況等を記録に残すことの難しさや拙さ、手がかりとする資料の少なさを感じた。例えば、橋の形は長方形を想定していたが実際にはつながる道路の状況に合わせてさまざまな形をしているので、測定箇所を決定するのがむずかしかった。

交通量が多くて危険なため測量することができなかった橋もあった。

写真撮影については、橋と撮影場所との位置や距離が道路が狭かったり街並み

写真13　甲子園口２丁目19-17の橋

が立て込んでいたりして、橋の全景をうまく収めることができないこともあった。

写真や文字・数字で表現しきれないときの手立てとしてスケッチを用いたが、あくまでも平面的な描写に終わらざるをえなかった。

その他、調査カードの項目として取り上げた年代(架けられた年月)と橋の形式についても調べることができなかった。

写真14　橋梁班の調査風景
（郷土資料館にて、平成20年）

視点を変えると、新しい関連事象が見えたので、そのつど追加調査をした。

調査活動を振り返ると、新堀川はそこに架かる橋とともに私たちには川と橋の風景の一こまではなく、それ以上の存在であると感じさせられた。

新堀川は、その歴史の中で武庫川との密接な関係が浮き彫りにされ、過去の関係は明らかにされているが、歴史調査団としてまとめるにあたって現在の武庫川とのつながりについても調査すべきであった。

（※本書に掲載した内容は、すべて調査時の状況であるため現在の状況と異なる場合があります。）

〈参考文献〉

『西宮市史』第二巻、西宮市役所、昭和35年3月。
『西宮市立郷土資料館紀要　西宮の歴史と文化』、西宮市立郷土資料館、昭和60年、7月。
西宮市立郷土資料館編『西宮歴史調査団調査報告書第2集　西宮の地蔵』、西宮市立郷土資料館、平成25年3月31日。

〈謝辞〉

調査中には、太田土建工業㈱太田右佳様、上之町の牧野様をはじめ多くの方々にお世話になりました。また、平成18年12月に甲子園口2丁目付近でお会いした男性からは、震災時の様子やこの地域の変化についての貴重なお話しを聞かせていただきました。

この場をお借りして厚く御礼申し上げます。